

序

私が高知大学の学生だったころ、沢村栄一教授（本年 1 月に死去）から英語史の講義をうけた。英語、ドイツ語、フランス語などヨーロッパの主要な言語はインド・ヨーロッパ語族という一つの語族に属しており、その先祖をたどれば印欧祖語というものにさかのぼり、その祖語の形を多く残している言語の一つがサンスクリット語であるという内容だったと思う¹。高校時代に創価学会に入会し、漢訳の経典も梵語から訳されたというくらいの知識はあったが、それまで梵語など何か自分とはあまり関係のない遠い世界の話のように思っていた。しかし、仏教の言語がヨーロッパ系のことばと関係があるというのは興味深い話だった。20 代から 30 代の半ばにかけて、仕事の関係から英語の習得に全力をあげていて、梵語・サンスクリット語のことは、ほぼ意識にのぼることはなかった。

1987 年の 5 月から、ある人の紹介で毎週土曜日に東方学院での上村勝彦博士（1944–2003；東京大学東洋文化研究所教授）担当のサンスクリット語初級の授業に参加するようになった。30 代も半ばに達し、記憶力の落ちる前にひとつやってみようと思いついたのである。一年間の授業が終わる頃には同学の士はほとんどいなくなったが、何とか挫折せずに初級を終えることができた。中級に進んだが、英語の訳本を見ながら意味をとり、授業についていくのが精一杯であった。都合 7 年間ほど通ったと思う。最低限のレベル、すなわち文法書と辞書の使い方が少し分かり、デーヴァナーガリー文字が読める程度にはなっていたと思う。

1991 年の 11 月、(株)セッセン・インターナショナル社長の川村良子氏と写真家の小阪和則氏がカトマンズを訪問した際、アーシャー古文書館の梵文法華経断簡 5 葉の写真を撮影し、筆者にそのプリントを提供された。ケルン南條本のどこに当たるかを同定して、何とかローマ字に転写することができた。92 年の 8 月にカトマンズを訪問して、実物の写本を確認した。同年 12 月発行の『東洋哲学研究所紀要』第 8 号にこのローマ字テキストを発表し²、抜刷を徳島大学教授の戸田宏文博士（1936–2003）に送ったところ、「一度徳島に来ませんか。写本研究のあらましについて説明してあげます」との連絡があった。

93 年 7 月 12 日と 13 日の両日、戸田教授の研究室を訪れた。長時間にわたり、19 世紀以

来の梵文法華經写本研究の概要と課題、またご自身が30余年にわたり行ってきた研究について熱心に語られた。それ以降、手紙、電話、ファクスでのやりとりが、教授が逝去される2003年まで続いた。この分野での「良き師」にめぐり会えたことに感謝している。はからずも初対面のとき、「法華（の研究）をやる人は、早く死にます」と冗談のように言われた。本気でやれば、膨大な資料と格闘することになり、十分な成果が出るまでに、精力を使い果たしてしまい、寿命が尽きるという意味だったのだと思う。そのときは、ご自身がそのようになるとは想像だにできなかった。

一方、創価学会と法華經写本との関わりは、ロシア、中国、インド、ネパールなどの諸機関、個人から池田大作創価学会インタナショナル(SGI)会長に、法華經の写本資料が贈呈されてきたことにその淵源がある。SGI会長は法華經写本プロジェクトの推進を提案。1994年1月、創価学会に「出版委員会」が発足し、その研究と編集、出版の実務は東洋哲学研究所に委嘱された。委嘱研究員に任命されていた筆者も、それ以降このプロジェクトに深くかかわることになった。以来17年間、無我夢中で走ってきた。

ほとんどの出版のデータが筆者のマッキントッシュ・コンピュータを通過していった。機種も4回更新された。本書で「法華經写本シリーズ」もナンバーでは11、シリーズの2が3点セットなので、点数としては13点目になる。以下に同シリーズの細目を列挙する。

- 1.『旅順博物館所蔵梵文法華經断簡——写真版及びローマ字版』（1997年5月3日発行）
- 2-1.『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本（No. 4-21）——写真版』（1998年11月18日発行）
- 2-2.『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本（No. 4-21）——ローマ字版1』（2001年5月3日発行）
- 2-3.『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本（No. 4-21）——ローマ字版2』（2004年3月25日発行）
- 3.『カーダリク出土梵文法華經断簡』（2000年5月3日発行）
- 4.『ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華經写本（Add. 1682 および Add. 1683）——写真版』（2002年3月26日発行）
- 5.『東京大学総合図書館所蔵梵文法華經写本（No. 414）——ローマ字版』（2003年11月25日発行）
- 6.『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク支部所蔵西夏文「妙法蓮華經」写真版』（2005年3月25日発行）
- 7.『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵梵文法華經写本（No. 6）——ローマ字版』（2007年3月30日発行）
- 8.『パリ・アジア協会所蔵梵文法華經写本（No. 2）——ローマ字版』（2008年3月31日発行）
- 9.『大英図書館所蔵梵文法華經写本（Or. 2204）——写真版』（2009年3月31日発行）
- 10.『ケンブリッジ大学図書館所蔵梵文法華經写本（Add. 1684）——ローマ字版』（2010年3月31日）

11.『大英図書館所蔵梵文法華經写本 (Or. 2204)——ローマ字版』(2011年3月31日発行予定)

法華經写本シリーズの中核をなすネパール写本の研究は戸田教授の先行研究を基盤に構想され、中心的には小槻晴明氏が4点のローマ字版を出版してその実質的な推進者となった。このシリーズでは、ネパール写本の写真版が、

2-1.「ネパール国立公文書館所蔵写本 (No. 4-21)」

4.「ケンブリッジ大学図書館所蔵写本 (Add. 1682, Add 1683)」

9.「大英図書館所蔵写本 (Or. 2204)」

の3点、4写本、ローマ字版が、

2-2 および 2-3.「ネパール国立公文書館所蔵写本 (No. 4-21)」1 および 2,

5.「東京大学総合図書館所蔵写本 (No. 414)」

7.「英国・アイルランド王立アジア協会所蔵写本 (No. 6)」

8.「パリ・アジア協会所蔵写本 (No. 2)」

10.「ケンブリッジ大学図書館所蔵写本 (Add. 1684)」

11.「大英図書館所蔵写本 (Or. 2204)」

の7点、6写本を出版したことになる。このシリーズは今後も継続される予定であるが、詳細はこれから検討される。

次に、本書、大英図書館所蔵写本の出版の経緯について述べる。2006年秋に第2期法華經写本シリーズとして、上記7-11が出版されることになり、筆者も11を担当することになった。2005年の秋に10葉ほどローマ字化を試みていた。本格的にローマ字化に着手したのは、2008年の秋であった。しかし、日常業務の半分が本業の『グラフ SGI』の英文翻訳の仕事であるのに加えて、シリーズ7-10の編集実務が重なり、ローマ字化の方は遅々として進まなかった。2010年の4月以降は『グラフ SGI』の編集以外は、写本に集中できるようになった。それでも、最終的なローマ字版の完成は校了直前になったのである。筆者にとっては、「習作」ともいふべき仕事になった。

この写本の概要は以下の通りである。

(1) この写本は、以前は大英博物館に所蔵されていたものであるが、現在は大英図書館の所蔵となっている(カタログ番号: Or. 2204, 175葉)。書写された時期は不明であるが、11-13世紀のものであると推定される。いわゆる「ケルン・南條本」の底本の一つとして使用された写本である。同書の脚注には略号 B で引用されている。戸田教授によれば、この写本はいくつかのグループに分けることのできるネパール系貝葉写本群の一つのグループ(B系と呼ばれる)を代表する写本である。

(2) Fol. 28(第28葉)が欠けているが、単に番号を“28”(第28葉)とすべきところを一つとばして、“29”(第29葉)としてしまったものである。後代の人アラビア数字で右の余白に

本来の番号を書き込んでいる。このローマ字版では当初から写本に書かれていた番号を採用する。ただし、この部分におけるテキストの欠落はない。

(3) 125b6 の最後から 126a1 の冒頭にかけて、「ケルン・南條本」の 319.6–350.3 に相当する部分が欠落したまま書写されている。この前後で書体はほぼ同じであるが、筆跡が大きく変わっているので書写した人物は二人かそれ以上の可能性が高い。

(4) その他、8a1 (17.3–6), 35b5 (81.10–13), 42b3 (101.4–7), 49a4 (117.3–6), 85a6 (211.3–6), 103a6–103b1 (258.13–259.2), 126a3 (350.9–12), 129b2 (360.9–12), 137a1 (379.6–9), 138a4 (382.2–5), 163b5 (450.6–9) など小さな欠落はかなりある。詳しくはローマ字版を見られたい。

(5) この写本には、訂正が何種類か存在する。

- a) 明らかに書写生本人の直しと思われるもので、本文と同じ太い筆跡
- b) 細い線による直しで本人か、同時代あるいは後代の別人による直し
- c) 赤い字で後代に加えられた訂正で、系統の違う写本を見ながら直しているので多くが不適切な直し

本書では a) のみを本来のテキストとみなしたので、この直しは表記しない。ただし、欄外に書かれているものは、元々はなかったものとみなし、適切であるものは採用し、() 内に表記した。b) と c) も適切であるものは採用し、() 内に表記した。

(6) この写本には、よく似た akṣara を混同して書写している場合が多く見られる。

g- / m- / s- (ग म स), t- / d- (द ढ), t- / n- / v- (न न ऩ), tv- / ndh- (व ण), th- / dhv- / ṣ- (ध ष ष), p- / y- / ṣ- (य ष ष), dhv- / bdh- / vv- (व ष ष), bh- / c- / r- / v- (च ञ न ऩ), ga / cā (ग ञ), gha / pā (ग ञ), etc.

(7) 1b の真ん中にカラーのイラストがある。菩提樹下にストゥーパがあり、その中に釈迦牟尼仏と多宝如来が並座している。写本の上下をはさんでいる板の内側には、かなりいたんではいるが、美しいイラストが施されている。詳しくはバンドールのカatalogを参照されたい³。

(8) B写本の系統について

次に、この写本の系統については、最も近いのは「ネパール国立公文書館所蔵写本 No. 3-678」(略称 N2), 次いで「アジア協会(コルカタ)所蔵写本 No. 4079」(同 A1)である。前半では「ケンブリッジ大学図書館所蔵写本 Add. 2197」(同 C6), 後半の一部が、「北京民族文化宮所蔵写本 No. 0004」(同 Pe) に類似する。時間的制約があり精査するまでには至らなかったが、難読箇所突き当たったとき、全部とは言わないまでも、これらの写本を見ると面白いように解決することが出来た。異読がある箇所は、大きく二つあるいは三つのグループに分かれている場合が多かった。以下、筆者が依拠した戸田教授の作成した表⁴と小槻氏が『パリ・アジア協会所蔵梵文法華經写本 (No. 2)——ローマ字版』に掲載した表およびコメント⁵を再掲する。

(戸田教授の表)

ネパール写本 (貝葉本)

グループ I C3, N1 (Chaps. I-II?), C4 (fols. 1-107, 118-140), Pe (1b-18?) = C1, 2, 106-129 = Group III を除く), K (fols. 20-181).

グループ II C5, C6 (fols. 76-78, 83-131).

グループ III T2, T6, C4 (fols. 108-117), C6 (fols. 1-75, 79-82), B, T7, N2, N3, K (fols. 1-19).

*グループ I はギルギット本及びチベット訳に比較的近い。従って古層に属すると言える。

ネパール写本 (紙本)

グループ I R, T9, 5, 4.

グループ II A2, 3, P3.

グループ III C1, 2 → Pe (Chaps. 1-2).

グループ IV P1, 2 → T2.

グループ V T3 → T6 (前半?).

グループ VI T8 → N3 (Chap. 1 を除く), W (Kn 本).

グループ VII A1 → N1, Pe, C4.

グループ VIII StP → N2?.

(小槻氏の表とコメント)

貝葉写本群 (西暦 11 世紀-13 世紀頃)

(1) C3, C4, Pe, N1;

(2) B, C6, T6, T7, N2;

(3) C5;

(4) K;

(5) N3;

(6) T2

これらの写本の中では、(1) が、ネパール系写本の最古層の読みを比較的良く保存していると考えられる。この読みは、ギルギット写本との類似性が高く、チベット語訳との関連が指摘される。また、(2) の諸写本は、戸田が日常的に「B 系」と呼んでいたグループに属する。(3), (4), (5), (6) は、それらの帰属が、最古層のグループや「B 系」と完全に一致すると断言できない写本である。

紙写本群 (西暦 17 世紀-20 世紀頃?)

(1) A1;

(2) A2, A3;

(3) T8, P3;

- (4) C1, C2;
- (5) R, T9;
- (6) T4, T5;
- (7) P1, P2;
- (8) T3;
- (9) W;
- (10) StP

(中略)

(1) は、おおむね「B系」の流れをくむ紙写本とみて大過ない。したがって、この紙写本は、「B系」に属するある貝葉写本を忠実に書写する意図をもって、書き写された紙写本であると言える。T8は、貝葉写本 N3 の読みを忠実に写した紙写本であるが、N3 は、テキスト全体の半分以上が散逸しているの、その失われた箇所を紙写本で補っている。ところで、アーシャー古文書館 (ネパール、カトマンズ) に保管されている 5 枚の貝葉写本は、N3 の一部であることに間違いはない。

筆者は、これら上記の部分にほぼ核心的な指標が示されていると思う。この B 写本のローマ字化作業を通して、戸田、小槻両氏の構築したネパール系梵文写本研究のフレームワークがいかに強固で、研究者が依拠するに値するものであるかをはっきりと確認することができた。

最後に、本書の完成までにお世話になった方々にお礼を申し上げます。

まず、創価学会インタナショナル (SGI) 会長、池田大作先生に深く感謝申し上げます。先生の発案によって写本シリーズも始まり、終始見守っていただき、今日まで来ることができたというのが実感です。先生の存在がなければ、創価学会の写本事業もあり得なかったと思います。さらに研究を発展させて先生のご恩に報いてゆく所存です。

今は故人となられた戸田宏文先生、上村勝彦先生には、地道な基礎研究がいかなるものかを教えていただきました。両先生が逝去されてほぼ 8 年、その学恩の深さをますます強く感じる昨今です。

次に、原田稔創価学会会長ならびに関係部局の皆様には厚く御礼を申し上げます。また、東洋哲学研究所の川田洋一代表理事 (所長兼任)、萩本直樹専務理事、森田康夫評議員、小関博文事務局長、大内裕家氏ならびに職員の皆様には種々のご助力をいただきました。心より感謝いたします。写本研究の先達である小槻晴明氏 (東洋哲学研究所委嘱研究員) には、陰に陽に激励を頂き、衷心より感謝の念を表します。英文の監修をしていただいたディラン・スカダー氏に感謝いたします。また種々助けていただいた創価学会国際室書籍翻訳部の山内正生部長はじめ同僚の方々にお礼申し上げます。

さらに、迅速に鮮明なカラー写真を撮影提供いただいた大英図書館・国際敦煌プロジェクトの責任者であるスーザン・ウィットフィールド博士、ならびに同図書館の写真部の皆様のご尽力に感謝申し上げます。さらに、多年にわたり梵文写本を管理されてきたマイケル・オキーフ博士のご努力にも感謝の意を表します。また、同大学図書館とのよき関係を築いてくださったロバート・サミュエルズ理事長、藤井和雄副理事長はじめイギリス SGI のスタッフの皆様、とりわけジェイミー・クレスウェル氏に衷心より謝意を表します。

末尾ながら、川村良子氏、小阪和則氏に感謝申し上げます。お二方の写真提供がなければ、現在の私の写本シリーズへの献身もなかったと思います。

私は毎日少しずつ作業をする
 千年前の古き文字で書かれたきみが
 ローマ字の衣に着替えて
 原稿となってその姿を
 現していく日々——
 きみのもつ永遠の生命が
 21世紀の人類の前で
 公知の存在となってゆく

2011年3月6日

水船教義

東洋哲学研究所委嘱研究員

注

1. 実際は、ヴェーダ語、古典ギリシャ語、リトアニア語などの言語が、サンスクリット語より多くの印欧祖語の特徴を残しているといわれる。

2. 水船 (1992). *Āśā*写本は戸田教授によって、さらに正確なローマ字化が行われた。戸田 (1997) を参照されたい。

3. Bendall (1902, p. 225).

4. 戸田 (1997a, p. 16).

5. 小槻 (2008, p. xxxii).